

# 國際東洋學者會議について

高田時雄

ヨーロッパにおける東洋學の發展は十九世紀に至って大きな質的轉換を遂げることになる。ヨーロッパ諸國が中東やアジアに殖民地を築き、その積極的な經營に乗り出すようになると、これらの地域の言語、民俗、歴史、地理、宗教などの實用的知識が求められるようになった。それ以前の東洋研究が、旅行者や宣教師の報告によってもたらされる斷片的な知識を據り所にしていたのとは異なり、豊富かつ正確な情報が入手可能となったことも學問分野としての東洋學の成立を支えるものであった。とくに十九世紀後半期においては、東洋學者（オリエンタリスト）たちの中には研究對象地域を實地に體驗するものもいよいよ多くなってくる。

東洋學の扱う範圍は中東からインドを経て極東に及ぶまできわめて廣く、一定の連關を持ちつつもそれぞれが独自の領域として存在していたが、この時期になると、一個のまとまりとしての東洋學が意識され始める。いわゆるオリエンタリズムであり、語としての初出は、フランス語を例にとれば、一八三八年であるという<sup>1</sup>。オリエンタリズムの歴史的本質については近年批判的な論調も見られるが、多方面にわたるその業績を勘案すれば、單純に同調することは出来ない。むしろ歴史的制約の中で達成された成果を肯定的な方向で繼承すべきであろう。

さて、こうしたヨーロッパ東洋學發展の時代にあつて、一八七三年、國際東洋學者會議（Congrès international des orientalistes）が發議開催された。この時点で東洋學の成立が公式に宣言されたものといえる。以後、若干の曲折や大戰中の中斷はあったものの今日まで三十五回にわたり繼續して開催されていることは衆知のとおりである。第一回會議がパリで行われたあと、第二回ロンドン、第三回サンクト・ペテルブルグ、第四回フィレンツェ、第五回ベルリン、第六回ライデン、第七回ヴィーンと續く。一九〇五年の第十四回會議がアルジェで行われているのを除けば（もっとも當時はフランス領であつたが）、一九五一年の第二十二回イスタンブールまではすべてヨーロッパの都市で行われている。これは善きにつけ悪しきにつけ東洋學というものがヨーロッパで成立し發展した學問であることをよく物語っている。しかし第二次大戰後は開催地も世界的に擴大され、一九六〇年の第二十五回がモスクワ、一九六四年の第二十六回がニューデリー、一九六七年の第二十七回がアメリカのミシガン州アナーバー（Ann Arbor）、一九七一年の第二十八回がオーストラリアのキャンベラ、一九七六年の第三十回がメキシコ、そして一九八三年の第三十一回が日本の東京と京都というふうに、相繼いでヨーロッパ以外の地で行われた。これは東洋學がヨーロッパ的傳統を脱却し、國際的な規模で研究が行われるようになったことを反映するものといえよう。またそれとともに東洋學自身も質的變容を餘儀なくされ、東京・京都會議では名稱を國際アジア・北アフリカ人文科學會議（Congrès Internationale des Sciences Humaines de l'Asie et de l'Afrique du Nord、略稱シシャーン）に變え、翌メキシコ會議からは國際アジア・北アフリカ研究會議（The International Congress of Asian and North African Studies、略稱イカナス）となり現在に至っている。

<sup>1</sup>オリエンタリズムの呼稱に先んじて、各國で東洋學會が組織され始める。フランスではアジア協會（Société Asiatique）が一八二二年に、英國では王立アジア學會（Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland）がその翌年に生まれる。ドイツではやや遅れて東方協會（Deutsche morgenländische Gesellschaft）が一八四六年に成立した。アジアの殖民地ではさらに早く、オランダ人によるバタヴィア學藝協會（Batavisch Genotenschap van Kunsten en Wetenschappen）や、イギリスがカルカッタに設けたベンガル・アジア學會（Asiatic Society of Bengal）などがある。

第一回の會議がパリで行われたのは決して偶然ではない。フランスには東洋學の深い傳統があり、その發展をリードしてきたのは正にフランスであるという強い自負があったからである。エジプト學はシャンポリオン（Jean François Champollion: 1790-1832）により作られたのであり、楔形文字の發見もフランス人に歸せられねばならないと彼等は主張していた<sup>2</sup>。中國學はいうまでもなくレミュザ（Jean Pierre Abel-Rémusat: 1788-1832）以來フランスの學問であった。普佛戰爭の失敗が、國民的關心を政治的あるいは軍事的な方向からむしろ學術的な面での國威發揚に向けさせたということもあるが、實際パリは名實ともに東洋學の大本山としての地位にあったことは疑いない。最初の國際東洋學者會議が開催される地としてはこれほど相應しい都市は他に見出し得なかったであろう。

この會議の議長を務めたのはレオン・ド・ロニ（Léon de Rosny）である。ロニは一八三七年フランス北部リル市近郊のルー（Loos）に生まれた。一八五二年にパリの東洋語學校に入學、東洋諸語とくに日本語を學んだ。一八六三年から無給の講師として日本語の講座を擔當する。一八六八年五月二十四日の政令により、レイノー（M. Reinaud）の死後空席となっていたアラビア文語の講座が廢されると同時に、日本語講座が置かれると、その席を占めた。第一回會議開催時には、三十六歳になったばかりである。一八八六年には高等研究學院（Ecole des Hautes Etudes）の副院長に任命され、極東の宗教を講じた。<sup>3</sup>ロニはフランスにおける日本學の開拓者であり、幕末から明治初年にかけてパリに留學した日本人たちと積極的な交遊をもったことが知られている。たとえば文久二年（一八六二）の遣歐使節に加わった福澤諭吉は、レオン・ド・ロニと親しく交わり、彼から西洋事情を詳しく聞いたことが分かっている<sup>4</sup>。また慶應元年（一八六五）幕府の命を受けてフランスに留學した福地源一郎（櫻痴）はロニに就いてフランス語を習ったという<sup>5</sup>。このようにロニは日本との人脈を早くから築いていたのであって、それが第一回の國際東洋學者會議を主催するにあたって大いに役立った。第一回パリ會議においてすでに数名の日本人が出席し、また會議全體において日本關係の論文が飛び抜けて多いのもロニの存在を抜きにしては考えられない。ではパリ會議にはどのような日本人が参加していたのであろう。

第一回の國際東洋學者會議は一八七三年九月一日から十一日までの期間パリで開催された。初日、会場となったソルボンヌの大講堂は各國の旗と豪華な調度で飾られ、そこに莊重なファンファーレが響き渡った。午前十一時、各國の代表團が參列するなかでの開會式の開始である。引き續き午後二時から本會議として日本學部會が始まったが、その議長席に座ったのは弁理公使としてパリに滞在していた鮫島尚信（Saméjima Naonobu）である。鮫島は挨拶に立って、概略次のような發言を行った。「本日諸君がこの日本部會に出席されておられることは、日本が西洋の諸國と目的と將來とを同じくする共同體に入ったことをヨーロッパで最初に證明するものであります。これまで我々は政治上、通商上の關係は持っておりましたが、今日初めて知的な關係を持とうとしています。私はいつの日か日本が教育によって一個の力を獲得するであろうことを疑いません。その力によって諸君と新たな社會的關係を築くことになるであります。この關係のみが諸國民を完全になぎ合わせるができるのです。それのみが無知と偏見とを取り除き得るからです。」いささか氣負った表現であるのは、明治新國家を代表する意氣込みの現れであろう。新生日本の外交にとっては、こうした國際會議の場は國家としての存在を主張する好機會であったが、「日本」が直接のテーマとなるこの部會こそはまさに檜舞台であったに違いない。鮫島はもと薩摩の留學生であり、

<sup>2</sup> テキストール・ド・ラヴィーヌ男爵（le Baron Textor de Ravisy）の發言を参照。 *Congrès provincial des orientalistes, compte rendu de la troisième session*, Lyon 1878, tome premier (Lyon, 1880), pp. 35-36.

<sup>3</sup> ロニの経歴はアンリ・コルディエ（Henri Cordier）の手になるネクロロギーによる。 *T'oung Pao*, vol. 15(1914), p.553.

<sup>4</sup> 『福澤諭吉全集』第十九卷（昭和三十九年岩波版）所収の「西航手帳」にはロニの手跡を留め、交遊のありさまを窺うに足る。

<sup>5</sup> 福地『懷往事談』一三六頁（明治二十七年四月民友社、いま『續日本史籍協會叢書』影印本による）。

慶應元年（一八六五）から明治元年（一八六八）まで英米において研學した。歸國後、維新政府に出仕し、明治三年四月、森有禮とともに初代少弁務使に任じられ、英・佛・プロシャ三國を兼務する。通常パリに駐在していたため、ロニに請われてこの會議に出席したものであろう。彼は、會議途中で匆匆歸國の途についている。

出席者名簿にはそのほか次のような日本人の名が見えている。まず田中不二磨（Tanaka Fuzimaro）で、この人は當時文部大丞の職にあり（のち文部大輔）岩倉使節團に理事官として参加、前年一行が去ったのちも引き續きパリに在った。會議では組織委員會の質問に答えるかたちで「近年における日本の革命」と題して、新政府下における變化と現況を解説している。入江文郎（Irié Fumio）は松江の人、大學南校中博士であったが、「學科質問」のため明治四年に佛國留學、十一年にパリで客死している。會議では中國部會において「古代中國人から見た異民族」と題する発表を行っている。今村和郎（Imamura Warau）は上記岩倉使節團とともに田中不二磨理事官の隨行員として文部中助教の身分で渡佛。會議當時はパリの東洋語學校講師（*répétiteur*）の肩書きを持っていた。おそらくフランス語にも通じ、才のあった人であろう、會議では「長谷寺の碑文」「日本政府の收入」「漢字の日本渡來」「日本の農業に用いる肥料」など多方面にわたる発表を行っている。最後に備前の人で野村ナオカグ（Nomura Naokagu）の名が擧がっている。恐らくは當時の留學生の一人と思われるが、履歴等明らかではない。

このように知日家にして活動的なロニの周旋もあって、第一回のパリ會議の當初から日本は國際東洋學者會議に深い関わりを持つことになったのである。もちろんヨーロッパで開催される國際會議であってみれば、日本からわざわざ出席するというようなことは考え及ばないことであり、第二回以後の會議には日本人の名は多く見られないのは致し方ないことである。それでもヨーロッパ留學中の人々がこの會議に参加することは間々見られた。たとえば、明治九年以來、東本願寺から英國に留學していた南條文雄と笠原研壽は、十四年（一八八一）にベルリンで開催された第五回東洋學者會議に出席した。ストックホルムの第八回會議（一八八九）には井上哲次郎（明治十六年から二十二年にかけてドイツに留學）が出席して「人性に關する中國哲學者の論争」を發表している。また同大會及び一八九一年のロンドン會議には人類學の坪井正五郎（明治二十二年から二十五年英國留學）も参加していたらしい。<sup>6</sup>

日本との関わりはこれまでとして話しを國際東洋學者會議そのものにもどそう。先に若干の曲折があったと書いた。それは一時期分裂騒ぎがあったからである。一八八九年の第八回ストックホルム及びクリスチアーナ（オスロ）會議のあと、次回開催地が決められていなかった。そこで第一回パリ會議によって定められた規定に基づいて、常任委員會のメンバーによりロンドンが第九回會議の開催地に選ばれた。ところが人間関係によるいざこざから、同じロンドンでともに第九回會議を稱して異なった會議が一八九一年九月と翌一八九二年九月に行われてしまったのである。さらに次回會議の開催地を、前者の會議ではリスボンに、後者ではジュネーブに決めてしまったために、第十回會議もまた分離して行われることとなった。結局、一八九二年九月から十月にかけリスボン及びセヴィリアで第十回會議が、また一八九四年の九月にはジュネーブで同じく第十回會議が開催された。ただリスボン會議は事實上ほとんど成果を擧げ得ず、やらなかったも同然の結果となり、自然ジュネーブ會議が眞正の第十回會議として認められるようになった<sup>7</sup>。

初期の各會議は主催國それぞれの事情や、組織體の性格を反映して、質において様々であったことは否定し得ない。ヨーロッパのオリエンタリストたちの集う場として、學問的に有意義な議論の展開されることもあったが、しかし一種のセレモニーに終わるような場合もあったらしい。アンリ・コルディエはストックホルム會議を論評して次のように述べる。どの會議でも参加者のために

<sup>6</sup>T'oung Pao, sér. 1, vol. 1 (1890), p.145; sér. 1, vol. 2 (1891), p.413.

<sup>7</sup>T'oung Pao, sér. 1, vol. 5 (1894), p.65.

供される祝宴が目当てのような連中がいる。寄生蟲のようなうるさい連中を廢除しようとするなら、學術のみが價值を得ているような、また娛樂は單に二次的なものでしかない、そんな小さな町で會議を行えばよい。經驗がその可能なことを證明している、と。コルディエの念頭にあったのは第六回のライデン會議（一八八三）である。そこでは尊大さも虚榮もなく、純粹に學術的な傳統をうけて會議が行われた。それに比べればストックホルム會議は、スエーデン及びノルウェー國王オスカー二世を名譽議長として行われ、意匠を凝らしたアトラクションや祝宴が會議を盛り上げるのに貢獻したものの、學術的にはなんの價值もないものであった *T'oung Pao, sér. 1, vol. 1 (1890), p.56ff.*。コルディエの批評は辛辣であるが、今日でも傾聴に價する。

具體的に國際的な協同が提案されることもあった。一八九九年、ローマの第十二回會議において、ロシアのラドロフが「中央アジア及び極東の歴史・考古・言語・民族調査のための國際連盟」( Association internationale pour l'exploration historique, archéologique, linguistique et ethnographique de l'Asie centrale et de l'Extrême-Orient ) の設立を提唱し、一九〇二年の第十三回ハンブルグ會議で承認され成立したのが、その一例である。この趣旨に沿って先ずドイツがトルファン等に調査隊を派遣し、その後相繼いで派遣されることになる各國隊の先驅けをなしたことはよく知られているが、必ずしも十分に協同の實を擧げることなくやがて雲散霧消してしまったのは惜しまれる。

國際東洋學者會議を機縁として、フランスでは地方の東洋學者會議 ( Congrès provincial des orientalistes ) が開催された。一八七五年にサン・テチエンヌで、翌一八七六年にはマルセイユで、そして第三回目は一八七八年にリヨンで行われている。この地方學會と銘打った會議は、パリのそれとは一線を畫するものとして、東洋學の大衆への普及、中央集中の廢除、東洋學の應用面を重視していた。純粹に學術的であるよりも、大衆に役立つ實用的な東洋學の確立を目指したのである。そのためこの會議の議題には通商や産業に比較的大きなウェイトが置かれていたようである<sup>8</sup>。

第一回のパリ會議以來、會議終了後數年以内にはそれぞれの議事録の刊行されるのが慣例であった。Compte-rendu, Transactions, Trudy, Atti, Verhandlungen, Actes などと稱されるものがそれである。なるほどこれら前世紀の研究の多くは、今日から見ればことさらに取り上げるべきもの多くないのももちろんである。しかし中には卓抜な着想に富みながら後世十分な發展を見るに至らなかったもの、また時代を畫した論文でありながら他の雑誌に發表されなかったものもあり、なお一定の參考價值を有する。更にヨーロッパ東洋學の發展を跡づける上での基礎資料であることは言を待たず、その意味での價值がもっとも大きい。またモノとしての議事録自身が備えている歴史的意義も強調しておいてよいと思われる。議事録の印刷には、東洋諸語の印刷のために特殊な活字が用いられねばならず、そのために活字の鑄造、植字などに老練な職人たちの協力を必要とした。ある植字工などは仕事に忠實なあまり、自ら幾つもの東洋語を習得した上で、それらの言語の書物を出版すべく印刷工房を開業したのもあったという<sup>9</sup>。東洋學の發展は單に研究者の研鑽のみならず、こうした環境が整ってこそ可能であった。これらの議事録は、したがって、システムとしてのヨーロッパ東洋學の全面的發展のあとを示すものともいえよう。すでに第一回のパリ會議において、縁の下の力持ちとして東洋諸語の印刷に盡力した印刷工房の職人たちが表彰を受けているを付記しよう<sup>10</sup>。

ただ残念ながら、わが國の研究所や大學圖書館には、これら議事録の揃いを完備しているところはきわめて少なく、通覽に不便であった。今回、第一期として第五回會議までの議事録が復刻再刊されることは大いに歡迎されるところである。今後繼續して出版されることを期待してやまない。

蛇足ながらつけ加えると、下記書には第三〇回メキシコ會議までの議事録收載論文の全リスト及

<sup>8</sup>註 (2) の文獻 p.36.

<sup>9</sup>Meulan 印刷工房の創立者マリウス・ニコラ ( Marius Nicolas ) のこと。Congrès international des orientalistes, compte-rendu de la première session, Paris, 1873, tome premier (Paris, 1874), p.58.

<sup>10</sup>同上、p.56ff.

び各回の會議に関する書誌が網羅されてあって便利である。

*Mezhdunarodnye kongressy vostokovedov 1873-1983 gg. Bibliograficheskij ukazatel'*, Leningrad, 1984.